



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.28 Jan.2012

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「シンポジウム特集号」

今月号は、先月開催された第3回なぎさの守人シンポジウム大阪大会に引き続き、東京大会が1月14日に開催されたので、その様子をお届けしたい。

なぎさの守人シンポジウム in 東京 開催報告

東京大会開催

第3回なぎさの守人シンポジウム東京大会が、1月14日に日本科学未来館で開催された。東京大会では、なぎさの保全活動を行う8つのグループの代表から藻場・干潟・サンゴ等の保全活動について事例発表とディスカッションが行われた。また、被災地からの報告として岩手県宮古地区の干潟保全グループから現在の状況や今後の保全活動の方針が報告された。各発表の概要を以下に紹介したい。



なぎさの守人が保全活動を行う場所



9人の“なぎさの守人”

火散布沼干潟を保全する会の取組

干潟の守人 林 竜也氏 (北海道)

北海道浜中町にある火散布沼（ひちりっぷぬま）は、太平洋とつながる汽水湖であり、アサリやカキ、ウニなど海産物の漁場や養殖場になっている。また、タンチョウが生息するなど多くの野生生物の生息場となっている。しかし、近年、沼にある干潟の地盤沈下やアサリなど二枚貝の天敵であるヒトデやタマガイなどの大量発生によって沼全体の環境や生態系に異変が生じている。また、その異変に伴って大量へい死した二枚貝の死殻が堆積し、底質環境に悪影響を及ぼしている。そこで、干潟の恵みを獲って暮らす漁師によって地盤沈下した干潟への砂の補充（以後、客土と呼ぶ）、ヒトデやタマガイの除去、大量の死殻



徒手やスターモップで除去した大量のヒトデ

の除去、底質改善を目的とした耕うんが行われている。このような様々な取り組みによって、客土した場所ではアサリの稚貝が 1m² あたり 2,000~7,000 個発生するなど干潟の環境や生態系が改善されてきている。

大間地区藻場保全の会の取組

藻場の守人 小浜哲夫氏（青森県）

本州最北端にある青森県の大間町。この地は言わずと知れたマグロで有名な町であるが、実はコンブを主体とした藻場も地域を支える重要な資源として大切に保全されている。大間地区藻場保全の会の取り組みについては、2月に発行する海のゆりかご通信で詳しく紹介します。楽しみに待っててください。

男鹿北部海を守る会

藻場の守人 鎌田誠喜氏（秋田県）

「泣くご（子）はいねが！」のなまはげがいる男鹿地区のなぎさには、冬になると「ハタ



藻場がないため海岸に打ち上げられる大量のブリコ

ハタ」がブリコ（卵）を産みに藻場にやってくる。この魚は、藻場の中の海藻にブリコを産む。また、ふ化した稚魚は藻場に守られながら成長する。しかし、その藻場が近年減少しており、大量のブリコが浜に打ち上がる異常な事態が起きている。そこで、現在、ハタハタを獲って暮らす漁師が集まり、藻場を再生する取り組みを行っている。また、浜に打ち上げられたブリコを海に戻しふ化させる活動も同時に行い、成果を上げている。

小波渡地域藻場保全活動組織の取組

藻場の守人 佐藤善四郎氏（山形県）

山形県の鶴岡市にある小波渡（こばと）のなぎさには、かつてホンダワラ類やワカメ、



水産高校の学生と一緒に取り組むウニや小型巻貝の除去活動。種付きの母藻の設置状況（写真右下）。

モズクなどの海藻が生い茂る藻場が広がっていた。しかし、昭和 50 年代後半から藻場は減少し、海藻を餌として育つアワビなども大きく数を減らした。そこで、海藻やアワビなどを獲って暮らす漁師さんたちによって、藻場を再生する取り組みがスタートしている。藻場の再生は、かつてホンダワラ類などの海藻が茂っていた場所の岩盤の表面を綺麗に掃除することから始まった。掃除後、近くの天然藻場や人の手で育った種付きのホンダワラ類（以後、母藻と呼ぶ）をロープに縛り海底に設置した。また、藻場の再生が急務であるため、海藻を食べるウニや小型の巻貝を除去する活動も地元水産高校の生徒と一緒になっ

て行った。こうした取り組みによって活動場所では、ホンダワラ類を主体とする海藻が数多く芽吹き、その後も順調に生長し、現在、藻場が再生してきている。

西条市藻場づくり環境保全協議会の取組

藻場の守人 近藤達也氏（愛媛県）

愛媛県の西条市のなぎさには、かつてアマモと呼ばれる海草が広がっていた。古老の漁師に話を聞くと、昔に比べ海の水は綺麗になったが、どこかおかしい…。この“おかしい”の原因の一つがアマモ場の大きな衰退であった。アマモは、魚介類の産卵場や成育場で、海のゆりかごと呼ばれている。そこで、漁師と一般市民とが一緒になってアマモを再生する取組が5年前にスタートした。アマモを再生させる方法は、試行錯誤の結果、種と腐葉土などを混ぜてガーゼに包み・投入するやり方を採用している。また、活動はなぎさだけに留まらず、小学生と一緒に育てた苗木を山に植える取組も毎年行っている。その他にも、藻場や漁業について出前授業を行ったりするなど、幅広い活動が展開されている。こうした取組の結果、少しずつだがアマモ場が拡大し、一昨年（2021年）の7月にはアマモに産みつけられた大量のイカの卵も発見された。ただ、昨年来襲した大型台風の影響でかなりのアマモが再び失われた。一からのスタートになるが、昔のアマモ場を復活させるべく今後も再生活動は地域の住民と一緒に進められる。



再生したアマモに産みつけられたコウイカの卵

綱島地区藻場保全組織の取組

藻場の守人 作元政志氏（長崎県）

長崎県対馬にある綱島地区のなぎさは、約20年前にはアラメやカジメ、ホンダワラ類が生い茂る藻場が広がっていた。しかし、その藻場は、現在、壊滅的な状態にあり、海の砂漠化と呼ばれる“磯焼け”が深刻な問題となっている。磯焼けの原因は、海水温の上昇、増加したウニの仲間“ガンガゼ”の増加による食害、海底への浮泥の堆積、漂着・漂流ゴミによる藻場環境の破壊などが考えられている。そこで、藻場で育まれる魚介類を獲って暮らす漁師が集まり、増加したガンガゼの除去や浮泥の除去、漂着・漂流ゴミの除去といった



20年前にあった藻場が、現在、瀕死の状態に…

藻場の再生活動がスタートしている。また、活動場所では、種をつけたホンダワラ類を袋に入れて海底に設置したり、アラメの生えたプレートをゲージの中に入れて海底に投入するなど、海底に種をばらまく取組も実施している。活動の成果は今はなかなか上がらない状況にある。しかし、活動を進める中で、藻場の再生が上手くいかない理由が、海藻を食べる魚類による影響であることが判り、今後の藻場再生の進むべき方向がみえてきている。

高山藻場保全会の取組

藻場の守人 日高慎一氏（鹿児島県）

鹿児島県の肝付町にある高山地区には、昭和40年代の頃は船で岸に近づけないほど藻



藻場の再生とともにウニの身入りが良くなってきた場が広がっていた。しかし、現在、なぎさのほぼ全域が磯焼け状態となっている。長期間磯焼けが継続する主な原因は、ウニによる食害。そこで、若手漁師を中心に、平成 18 年からウニ除去活動を中心に藻場再生を行っている。平成 20 年度からは、年に 1 回、水産高校の協力を得て、スキューバ潜水ができる生徒と一緒に除去活動を実施。スキューバ潜水では、効率的にウニを除去することが可能で、素潜りでこれまで活動してきた保全会メンバーの数名が潜水士の資格を取り、現在活動を進めている。また、ウニ除去活動に並行して、種付きのホンダワラ類の設置なども実施している。これら取組によって、現在、浅場の方でホンダワラ類の群落が広がっている。また、ウニの身入りも良くなってきており、板ウニづくりをやりたがる漁師も出てきている。そして嬉しいことに、一緒に取組を行った水産高校の生徒の一人が高山地区に来て漁業をやりたいと話している。

伊江環境・生態系保全活動組織の取組

サンゴの守人 八前隆一氏（沖縄県）

沖縄本島の北西の洋上に浮かぶ伊江島。島の周辺のなぎさは、礁池（イノー）が発達し、サンゴが広がっている。しかし、島のサンゴは 1998 年に起こった大規模白化によって壊滅的な被害を受けた。現在では、複数のポイントでサンゴが回復してきているが、他地区で問題になっているオニヒトデの大発生、島

に押し寄せる漂着・漂流ゴミ、ダイビング船のアンカーリングによるサンゴ損傷などサンゴにとって悪影響を及ぼす問題が起きている。そこで、島の漁師が中心となってホテルスタッフなどと一緒に、オニヒトデの密度コントロール、漂着・漂流ゴミの除去、サンゴ保護区におけるアンカーリング禁止などの呼びかけ活動が行われている。現在、これらの取組によって、イノー内のサンゴは維持されており、一定の効果が得られている。



作成したリーフレットは観光客や地域住民へのサンゴ礁保全の普及啓蒙にも利用される

最後に・・・

シンポジウムでは、昨年の大津波によって甚大な被害を受けた岩手県宮古市のなぎさの状況についても報告が行われた。報告を行ったのは、宮古湾干潟環境保全委員会メンバーの芳賀さん。芳賀さんによると、現在、干潟は干潮になっても干上がる場所が少なく、地盤が沈下しているそうである。ただ、今年の 1 月上旬に干潟前面の水深 2-3m のところにアマモが認められたり、河口前面の干潟で被災後生まれのアサリ稚貝が 1m²あたり 100 個以上出現したり、回復の兆しが認められているそうである。報告の最後に芳賀さんが「今回の震災により活動は一からのスタートになりました。しかし、これに悲観せず、前向きに考えてこれから取組を行っていきたいと思います。全国の皆様のご支援、本当にありがとうございました」と笑顔で話された。

（取材・文◎吉永 聡[本誌編集部]）

